



Title	ケース・スタディ・ハウスにおける建築家の空間像に みるライフスタイルとその表象
Author(s)	末包, 伸吾
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ケース・スタディ・ハウスにおける建築家の空間像にみるライフスタイルとその表象

末包伸吾／関西大学

ル・コルビュジエのドミノ・システムやシトロアン型量産住宅、グロピウスの乾式工法による量産型住宅への試行、CIAMにおける最小限住宅等の議論、さらにワイゼンホーフ・ジードルクなど、機械を生産するかのごとく、普遍的で合理的な建築を志向し普及させようとした近代の建築家たち。機械をモデルとする彼らの思考体系は、その後の住宅部品から住宅そのものの規格化と大量生産へとつながり、後には工法の標準化・簡便化、高性能化へと歩を進め、現在にいたる。特に、戦争などからの復興過程や高度経済成長下など、住宅への急速な社会需要への対応が求められる場合に、規格化住宅が採用される事例が数多くみられた。

規格化を基調としながらも、「新しい」ライフスタイルとその空間という空間像として提示する試みに、ケース・スタディ・ハウス・プログラム¹（以下、CSHP）がある。イームズ夫妻の自邸（CSH#8）で有名なこのプログラムは、当時、世界の建築メディアとして多大な影響を有していた雑誌「アーツ・アンド・アーキテクチャー（以下、A&A, 1938-66）」が主催したものである。編集長J.エンテンザは1945年1月号でCSHPの宣言²を行う。当初は8つのケース・スタディ・ハウス（以下、CSH）が計画され、宣言とその作品群に示された特徴は、南カリフォルニア特有の住宅の仕様を満たし、良好な住環境を形成すること、一般の人々が手に入れる事ができる現実的な基準に即したものであること、個々の住宅は複製可能であるとし、製造業者との協力を約束すること、

大多数のアメリカ人を対象に、戦後の生活を示す新しいデザインであること、手に入れられる最良の材料を最良の方法で使用すること、一定期間一般に公開すること、作品はすべて「アーツ・アンド・アーキテクチュア」誌に掲載することなどであった（傍点、筆者）。それは建築家のみならず、施主や建築部材メーカーを含む広い範囲を対象にした、「新しい」ライフスタイルの啓蒙であり、理想的な空間像を示すことを、建築雑誌が束ねるメディア・ミックスの先駆けとしても捉えられる。

1945年から20余年にわたるCSHPにおいて36件が提案され25件が建設された。CSHPは、ロサンゼルス近代建築の第一世代のリチャード・ノイトラ、第二世代のラファエル・ソリアノ、第三世代のクレイグ・エルウッドやピエール・コーニグらが、新たなライフスタイルを新たな空間を、規格化や普遍性を視野に入れて応えたもので、現代においてもその可能性の開示が強く求められている。

一連の研究では「空間像」という言葉を仮説的に用いる。その理由として、①CSHPが、「新しい」ライフスタイル自身を、仮想的かつ理想的な姿で誌面に提示することを求めていること、②建築作品は、建設後の写真が掲載されることを常とするのに対し、CSHPでは、竣工前にパースを中心に読者に示す必要があったため、パースの比重が高いこと、③パースは、全ての場景を均等に収める写真とは異なり、建築家が理想とし強調したいライフスタイルや空間が示されることの

3点があげられる。さらに、パースという設計途上での表象と、完成後の建築写真との比較から、建築家の空間生成のプロセスにも迫りえるものと考えられる。同時に、建築家の理想が、パースに空間像として表象されたものとして、言説と作品との比較検討を行うことで、従来の言説や図面・写真のみを対象とした分析では明らかにしえなかった建築家の特質が、より明確に引き出せるものとする。

今回の発表は、以下の4項目からなる。

①ケース・スタディ・ハウス・プログラムに関する一般的考察では、その概要を示した。②『アーツ・アンド・アーキテクチャー』誌に掲載されたケース・スタディ・ハウス・プログラムの全パースを対象に、それらの全パースを、「建築的要素」、「生活環境的要素」そして「周辺環境的要素」に区分し、それらの各項目の表現の傾向をつかみ、プログラム全体のパース表現の枠組みを示し、7つのタイプとその建築家を導いた。③『アーツ・アンド・アーキテクチャー』誌に掲載されたケース・スタディ・ハウス・プログラムの建築家の言説にみる建築概念について検討するものである。先のパースの類型から選出された5名の建築家、チャールズ・イームズ、ラファエル・ソリアノ、クレイグ・エルウッド、ピエール・コーニック、そしてエドワード・キリングワースについて、彼らが示したCSHの具体のプロジェクトに関する言説を、共通概念としての「工業技術」、「生活環境」、「周辺環境」そして個々の建築観である「空間概念」の4項目及びその下部構造の形式に、対象建築家についての建築観や設計過程における思考を構造化した。その上で、それらの思想がパースにどのように反映されているのかを示した。さらに④空間描写としてのパース表現にみる建築家の思考と表現については、言説比較、写真比較、構図分析を通じた

思考と表現の関係を総合的・相対的に構造化を行った。その結果、イームズは生活の器としての空間が樹木と一体化していることを重視していたことを導き、ソリアノは常に柱を意識させる構図からその存在感や正確なプロポーション・モジュールを重視する「建築至上主義」とされる一面を明らかにした。クレイグ・エルウッドは、内部から外部へとむかう構図により、彼の主たる構成言語である壁の構成によって内外を連続させることを企図していたことも導けた。コーニックは、架構と眺望への意識を、パース表現で克明に示していた。そしてキリングワースは、中庭と一体となった室内空間に重きをおき、彼の構成手法であるシンメトリーをパース表現においても重視していたことが認められた。これらの結果から、彼らのパース表現は自身の建築観を端的に示すものであることも確認された。今後は、個々の建築家に絞って、より詳細な分析を加えていく予定である。

- 1 Esther McCoy; *Case Study Houses 1945-1962*, Hennessey & Ingalls, Los Angeles, 1962.
Catharine Smith ed.; *Blueprint for Modern Living*, MIT Press, Cambridge, 1989.
岸和郎・植田実監修、『ケース・スタディ・ハウス』、住まいの図書館出版局、1997。には上記書に含まれる論考の邦訳をはじめ、McCoyや建築家・施主へのインタビューが収められている。
Barbara Goldstein; *Arts and Architecture: The Entenza Years*, MIT Press, Cambridge, 1990.
- 2 *Arts and Architecture*, Jan., 1945, pp. 37-41.